
異世界の方、いらっしゃい!

砂上 建

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の方、いらっしやい！

【Nコード】

N4946Z

【作者名】

砂上 建

【あらすじ】

異世界への憧れというものは誰もが持っていたものだ。しかし成長していくと誰もが失ってしまうものでもある。多くの人が異世界というものの存在を気にしなくなったある頃、様々な要因が重なり、異世界の存在を捉えることに成功した。それから時が流れ、街中で普通に異世界人が歩くようになったこの世界で、ある少年に不思議な縁が寄り集まる。

これは、少年？遠原櫟とあはしりくぬぎの個人的な問題の物語である

そういった描写も今後入る予定なので残虐描写ありにしています

雨、降り注ぐ（前書き）

警告とお願い：ファンタジーと銘打ってはいますが、ほとんど現代物です。剣と魔法の世界を期待していた方は申し訳ありません。どうかご了承ください。また、誤字？脱字があればどうか教えてください。

雨、降り注ぐ

この世界には昔、「異世界」というものへの憧れを持つ人間がたくさんいた。ただ生きているだけののように感じられてつまらない現実、太陽と月が周まわってさえいれば日々なんて勝手に勝手に進んでいく。そこに自分がいるかどうかはどうでもいい。そう思った人間は多く居た。

そして流行ったのがいわゆる「異世界もの」。異世界の住人たちが繰り広げる物語であったり、もしくはそこに現実世界の住人がいたりする話だ。それは現実に退屈たいくつする人たちの心に強い衝撃を与えた。なかには「自分もいつかそんな世界へ行ってみよう」と思うような人も出てくるほどだ。そうしてみんな同じような時期に夢から覚めて、現実と正面から向き合い始める。「ああ、そうだったことにあこがれていた時期もあった」と。

その人たちから子供が生まれ、また同じように現実をつまらないものとして見て、異世界へあこがれる。そしてまた、夢から覚さめる。そんなことが何度もくり返された。物語というものはくり返されるうち劣化れっかしていく。異世界を主題にした作品は溢あふれるほど生まれてしまい、一昔前には子供にまで飽きられるようになってしまった。

そうしていつか世界が「異世界」というものに対して何も感情を抱かなくなっていたある時。ある事件が起こった。その年の一年前に行方不明となっていた一人の高校生の少年が、ひょっこりと家に帰ってきたのだ。

アニメやゲームでしか見たことのないようなファンタジックな服

装の男女を引き連れて。

当然、その少年の両親はその人たちを疑った。何しろその頃にはすでに剣を持つて闊歩するような時代錯誤の日本人は居ないし、外国でも当然そんな危険人物はいない。いたとしてもコスプレイヤーだろうが、1年間行方不明だった少年にコスプレ姿でついてくるような空気の読めないやつは恐らくどこにも居まい。両親が少年に、この人たちはどこの誰なのか、ということを探ねると、少年は聞いたことのない国名を言った。両親が首をかしげると、少年は「自分は異世界に行っていて、ちよつとそこで冒険をしていた」などと言った。この男女はその時の仲間だという。それを聞いた両親は最初信じていなかったが、少年はさらに信じられないようなことをした。

少年の手のひらの上に赤い小さな火の玉が浮かぶ。そしてポンツと小さく破裂^{はれつ}。それは少年が異世界で覚えた魔術の一つであった。それを見た両親はその場で卒倒してしまつたが、その後少年とその仲間たちが介抱^{かいぼう}し、事の説明に一晚かけてようやく両親には信用された。

一方世間では最初は子供の悪ふざけか何かと言われていたが、少年や仲間に話を聞いていた研究者たちが、数年の研究で異世界というものの存在を捉^{とら}えることに成功すると、世界中が驚愕した。今まで創作の中でしかないと思われていた異世界の存在が、現実に初めて確認されたのだ。昔、異世界を夢見た者も、当時の若者たちも、みな心踊らせていた。そうして発見された異世界へと渡るため、少年の仲間の協力により、世界を渡るために魔術を使われた初めての機械、ポーターが産まれた。世界で決められた外交のための親善大使と、ポーターの安定のために少年の仲間の一人がその世界へと向かった。数日後、彼らが帰還したときに連れてきた魔女^{まじ}？ベアトリス。彼女の力により、我々はより多くの世界があることを知ったの

であつた

大城書店『新現代史』序文より

+++++

「あのさ…古賀先生」

「ん？どうした、遠原？」

6月の下旬ごろ、ある高校の教室でオレ、遠原櫟は、一人の男性教師と一緒にいた。個人授業、というわけではない。ただ中間テストに失敗して補習と相成ってしまったのだ。教師の名前は古賀近実。クラスの担任であり、世界史の授業を担当している。見た目が中年のオッサンなため、このみというカワイらしい名前が台無しとはもっぱらの話だ。

「先生……ちょっと語り口調なのがやけにイラつくから、黙っててくれませんか……？」

イラつくが相手は教師なので一応敬語だ。基本この中年に敬語を使うやつはいないが、望まぬ補習なんていう状況では、相手の機嫌を損ねるのはよくない。

「なんだ遠原、こっちのほう好奇心やワクワク感が溢れてくるだろう？」

「いえ、むしろツッコミたい衝動に駆られました。なんで壮大な物語の序章みたいな語りなんですか」

「いや、壮大だぞ。具体的にいうと、ここから150ページは続く」

「それは教科書の話でしょう!?というか、俺の補習科目は数学です!」

この中年は自分の担当すら覚えてないのかとちよつと不安になる。数学の担当は確か青海おしみという、去年入ってきた背の小さい可憐な女性の先生なのだが……

「しょうがないだろ。青海ちゃんが急用らしいんだから」

「だからって古賀先生が来ることはないでしょう。さっき語つたのも世界史じゃなくて「新現代史」の内容ですし」

新現代史とは、この世界が異世界の存在を知つてからの歴史のことだ。まだそんな頃からは70年近くしか経っていないが、その頃から科学などの新たな発見が山のように見つかり、異世界の人間とのちよつとした交流なども増え、歴史の勉強としてはうつつつけのものとなった。そのころからの歴史を新現代史、それ以前を日本史・世界史として扱っている。それはそれとして何でこんなめんどくさがりに見える中年教師が数学の補習にやってくるのか…と思つてみると、加賀がやれやれ、というような表情をした。

「青海ちゃんはいねえけどよ、ここにいる可愛い近実ちゃんでもあ、我慢してくれや」

「すみません先生、気持ち悪いのでトイレで吐いてきます」

吐かないと体内から腐りそうなので、とは言わないでおこう。中年にはやさしく。しかし教師には厳しく。

「待て。……俺も行かせてくれ。あんなことをいうのはやっぱりやめておいたほうがよかつたな……すまん」

「自分で言っておいて何いってるんですか。許してくれるんならもう今日は帰ってもいいですよね?というか、帰らしてください」

外は生憎あいにく……というか、梅雨なので当然のように雨が降っている。しかも、朝のニュースにでてきた気象予報士からも「満タンのバケツをひっくり返したかのような雨」というお墨付きももらっている

ほどの土砂降りだ。クラスメイトたちが帰っていった時はまだ普通だったが、2時間ほど補習を続けている今は……もう、圧倒的に違う。雨が窓を叩く音がしきりに教室や廊下から響いてくるつてのがおかしい。これ以上強くなられでもしたら、傘も保もたないんじゃないか？

「いや、ダメだ。こつちだつて頼まれたからには最後までやつてやらないとな……」

「えー、そりやないでしょう。これ以上雨がひどくなったら傘があつても濡れるかもしれないじゃないですか」

「そりやあ、こつちだつてさつさと終わらせて帰りた」

「……あ」

今気づいた。これ、別に長々と続ける必要はないんじゃないか？担当の教師はいないし、そもそも何か課題が出されてるわけでもない……多分忘れたんだろうな……そうなるということに意味が特に無いうえに二人とも帰りたい……そのことに加賀も気づいたようで一瞬アホみたいな表情になったが、そこは自称「可愛い」近このみ実ちゃん。この場をどうすればいいかすぐに気づいたようだ。「しょうがねえから今日はもう帰れ。日を改めて青海ちゃんの都合がいい日にな」

完全な棒読み、ありがとうございます。この時点でうまくごまかせるかな、という不安な気持ちは吹っ飛んだのでオレもちゃんと返そう。

「え、本当ですか、ありがとうございます」

一瞬、加賀が「お前、そこはもうちよつとがんばれよ……」「みたいな目を向けてきたが、あんたが言うな。気をつけてなー、という声を背中に軽い足取りで傘とかばんを手に取つて、教室を出る。

雨のせいかな雲のせいかな、外は少し暗かった。

+++++

私立深根^{みな}魔術高等学校。それがこの学校の名前だ。今はこの魔術学校というのは各地にある。どうやら魔女ベアトリスがこの世界にやってきて始めた事の一つに、魔術の教育というものがあるらしい。異世界との接触^{せつじやく}にはどうしても機械以上に魔術の力が必要、ということらしく、魔術を扱える人間を増やすために始まった世界規模のプロジェクトだ。ただ最初は教える事のできる人の数も限られており、少人数のエリート教育だったが、今ではそういった事はなく、こうして普通に私立でも立てることが出来るようになっていく。国立でもエリート主義でもなんでもないので、俺のような奴も通えるような気軽さだ。普通の学校としてもそれなりのレベルであるから、ここを希望する学生も多いという。女子の制服も目立つたりするよ。うなところや、派手なところは無い(とはいっても魔術学校の制服と普通の高校の制服は見た目からして違うが)が、着る者の可愛らしさを十二分に引き出せるため、入学を狙う娘^こもいるほどだ。入学はせずに制服だけ買おう、という人のために、制服自体は誰にでも売ってくれるらしい。一応うちにも2着ほどはある……家族のだが、そしてベアトリスがやってきてから変わった事と言えばもう一つ、街並みが少々おかしくなった、というか、コスプレみたいなのが増えた。間違えてはいけけないが、異世界からの来訪者達や、自分の世界から転移してきたやつらだ。コスプレイヤーと間違えらるとてもなく怒るので要注意。どうもこの世界は様々な世界の集まりの中でも中心の方に位置するらしく、色んな世界から人が流れてくることがあるらしい。異世界の人間を元の世界に帰すことは、本人が希望すれば行われる。しかし帰すのは簡単らしいが、こちらの世界の人間が異世界へ行くのは結構難しいようだ。ベアトリスと遭遇して帰ってこられた親善大使たちは結構運がよかった、ということだ。

う。

異世界の話ついでにあと一つ、実は世界自体は色々分かれているが、そこに住む人々はほぼどの世界も同じと言われている。平行世界、というやつだ。たとえばさっき出た少年の仲間だった男女はこの世界ではイギリスのカップルだったらしく、テレビに映ったフアンタジーな衣装を身にまとった自分たちを見て「見るよ俺たちすげえ格好してるぜH A H A H A！」などと言いながらイチャイチャしてたそうだ。爆発してしまえ。ただ、どこの世界も同じ人間じゃない、というわけではなく「元の世界では生きていたけど、別の世界では死んでいた（逆も可）」「自分の世界では過去に生まれていた人間or未来に生まれるはずの人間が別の世界では今生きている」なんていうこともあるらしい。

時代を遡れば刀さかを持つていた侍が歩いていて、ということがあったが、今ではプレートアーマーたいけんを身につけ、大剣を背負う人間も珍しくはない。同じ顔の人間は3人いる、という言葉も今となっては3人どころではなく、死語になって久しい。異世界の存在が珍しいのだ、新鮮だのといった気持ちも最近では、今さらという感じがする。もはや今の時代は基本的に異世界すらも当然の存在として見られている。例外もあるにはあるが。

「（別にドライだとは思ったりしないが……あれだけ盛り上がったわりには、一気に冷めたような気がするな……）」

初夏だというのに、雨のせいで外の空気は冷たく、雨独特の臭いがする。少し嫌な気分で帰る途中、商店街を抜けようとすると、黒いリムジンが横を通った。なんとなく見てみるとスモークを張っていなかったので中に乗っている人が見えた。確かこの前、道のど真ん中にいきなり剣を持って現れて、姫がどうだのと叫んでいた騎士だったか。その時とおなじ鎧よろいを着て車に乗せられていた。

「（鎧を着て車に乗っていた……となるとやっぱり、元の世界に帰るんだろっな……）」

あの時来た騎士の顔と剣には血がこびりついていて。そして、姫がどこにいるかとか聞いてきたりしたらしい。多分彼はここに来るまでに戦っていた。恐らく、『姫』という人物を探し、あるいは救い出すために。そんな大事な戦いから一気に別世界へと飛ばされた彼の気持ちを、悔しいのしろっな、としか自分では測ることはできなかった。

さらに進んでいると、真っ赤な髪の毛の男がエプロンをつけて野菜を売っていた。その髪の色に買物に来たおばちゃんは怯え気味だったが、男の紳士的にしようとして失敗しているが、裏表はなさそうな態度にとりあえず、落ち着いているようだ。

あの男も確か先ほどの騎士のように、この世界に突然やってきた人間だったはずだ。そんな彼が今もこの場にいるのは、この世界にこのことをよしと思ったのしろっな。帰ることも可能だが、こうしてこの地に残ることも可能だ。その場合、保護責任者が必要となるが、それはこの世界の一般市民なら誰だっけ。彼の場合は八百屋の主人だろっ。歩きながら見ていると、男がおばちゃんに傘をあげている。それをもらったおばちゃんが顔を赤らめ……ちっ、ただのフラグ乱立主人公野郎か。爆散しろ。

+++++

商店街を抜け、家の近くの道へとたどり着く。傘ももうほとんど意味がないなあ、などと思っていると、道の向こうから走ってくる

一人の少女が視界に入る。

その瞬間、心のうちにドス黒い感情が芽生え、それが一気に身体中へと伝わっていくのを感じた。

頭が、彼女の存在を認識しようとする。足が、彼女の元へと駆けていこうとする。……手が、彼女を捕まえようとする。いったい何がどうなっているんだ？という思考をはさむ暇もない。ただ、必死で黒い感情を抑えようとした。傘を手から離し、「満タンのバケツを思いっきりひっくり返したような水」を一気に身体に浴びる。目を覚まさせるのには顔を洗うのが一番いい。もつとも目がスッキリする。こんな寒い状況だと、雨水もわりと暖かいような気がするな、などと考えられるようになったあたりで、黒い感情は溶けるように消えていった。

「（いつたいなんだっただ……？あんなふうに憎むような相手なんていなかったと思うが……）」

考えても仕方ないか、と思考を中断する、というかこれ以上は濡れたくない。濡れた服の洗濯も楽ではないのだ。もう意味があるのかわからないが無いよりマシなので傘をとって、さっさと家に帰ろう……そう考えていると、目の前に、おそらく先ほど向こうから走ってきたであろう少女が息を切らしていた。どこの学校かはわからないが、制服を着ているという事は、学生だろう。なぜか傘を差していない少女の顔を見みると、少女は涙を浮かべていた。雨水と涙でどちらかもわからないほどに顔が濡れているが、嗚咽が混ざり、手で目を拭う仕草は泣いているようにしか見えなかった。

「遠原……さん」

オレを、知っている？本当に誰だ？こんな子をオレは、知らない。頭の中で知り合いにこんな人はいただろうか、と必死に思

い出そうとするが出てこない。その内、彼女が俺に抱きついてきた。

「遠原さん……お願いです。私を　　助けてください……」
頭の中に、結局彼女らしき人物が出てくることはなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4946z/>

異世界の方、いらっしゃい！

2011年12月17日00時58分発行